

「喜びの主の教会は前進する」

フィリピの信徒への手紙
説教

1章 12節～14節
市川忠彦 牧師

聖霊が降ったペンテコステから約2千年。この中に大阪教会の144年の歴史もあります。初代教会の300年間は、まさしくローマ帝国による『迫害の歴史』でした。厳しく激しい迫害、殉教の死を遂げる人が次々と出て来て命がけの信仰生活でした。

ところが、この300年間を見ると驚く事実に気づきます。①迫害の厳しい300年間と②信仰が強く燃え上がった時代と③伝道が拡大した事、この3つが一致しているのです。

その不思議な秘密を解く鍵が、本日与えられている『フィリピの信徒への手紙』です。これは伝道者パウロが、フィリピ教会の人々に送った牢獄の中から出された手紙です。この手紙が書かれた紀元60年頃、世界はローマ帝国の悪名高きネロ皇帝の時代。横暴で残虐非道なネロによって、生まれたばかりの教会は大迫害を受けていました。

パウロは、ご復活の主キリストに出会って救われ新しく生きる道、キリストを伝える伝道者の道を与えられました。その為、今牢獄に捕えられています。福音の前進どころか後退と思える状況です。しかし、パウロは「わたしの身に起こったことが、【かえって】福音の前進に役立った」(12節)と言うのです。

この手紙は、不思議な事に昔から2つの名前と呼ばれています。一つは『牢獄からの手紙・獄中書簡』。もう一つは『喜びの手紙・歓喜の書簡』。不思議です。私は、その福音の不思議な秘密・力を知りたい、この秘密を多くの人に伝えたいと願いました。これが、私が東京神学大学に行った大きな動機であり、その後50年間の伝道者としての歩みの目標と祈りでありました。

私達は、今パウロの様に、牢獄に捕らえられている訳ではありません。しかし、現在の私達も、不安や孤独、罪に捕らえられ、がんじがらめに縛りつけられています。牢獄に似た状況におかれているのではないのでしょうか。パウロと同じ経験をしているのではないのでしょうか。

そんな中で私達はというと、不運を嘆き、苦しさや絶望を訴えているだけではないか、牢獄からの手紙を悲しく書くだけで終わってはいないか、それでよいのかが問われているのです。

私達は教会に招かれています。招かれて私達も「牢獄からの手紙」を書くのです。そうであるのに、牢獄の中だが、「喜びの手紙」を書かせて下さるのです。これこそが、「キリストの福音・良い知らせ」そのものの力です。福音に生き

る信仰者の強さの秘密です。この為に、主は、十字架に架かり、甦って下さったのです。

本日、私達は、帰天者を覚え記念する特別な時を持っています。今、天のキリストの教会に移された数多くの先輩達・信仰の生涯を全うし、今も「証人として」雲の如く私達を取り囲み、力強く証している先人達が呼びかけているのではないのでしょうか。しっかりしなさい！福音の力を信じなさい！

「福音の前進に役立った」(12節)、この前進という言葉は「道を切り開く」「切り開いて進んで行く」という字が使われており、「開拓者が藪(ヤブ)を切り開き道なき所に道を作って一歩また一歩と進んで行く」という意味です。キリストが導き道を切り開いて進ませて下さるのです。死から命へ、絶望から希望へ、失望・落胆から感謝と喜びへと変えられて行きます。

私が主任牧師として就任した日1990年4月1日、前日からの「中高生一泊研修会」が行われて主題『教会を愛する』、副題『大阪教会のルーツを探ろう』を掲げゴルドン宣教師が苦闘の内に伝道した家の跡地など大阪教会のルーツを辿りました。そこで、初代教会と同じ困難な伝道がなされたことに気付いたのです。大阪教会の階段踊り場にある「クリシタン・邪宗門禁止」の高札が取り外される前・まだ厳しい迫害・弾圧があった時であった事を辿ったのです。

キリストは、牢獄の中に入り込み、鎖に固く縛られているパウロの中にも、不安と恐れの中で苦しむ人々の中にも、信仰の危機に直面している信徒達の中にも、そして大阪教会の歴史の中にも、否、我々の牢獄の中にも入り込んで下さって、支え、生かして下さいます。

私は50年の伝道者としての歩みを終えて昨年3月末隠退しましたが、振り返ると、神さまは私の為に、どんな時にも「寝ずの番」(出エジプト記第12～14章)をして守り支え導いて下さってました。イスラエルの民がエジプトを脱出し、荒野で苦しみの中、行きつ戻りつ彷徨していた多くの神の民の中で「夜もすがら」力強く働き続けて下さった主。この同じ主が、私の内で力強く働き続けて下さったのです。

御一緒に、この「夜もすがら」働き「寝ずの番」をして下さる主を喜び主を証しする人生を全うしようではありませんか。喜びの主の教会は確実に前進するのです。

(記 市川和恵)